

- ・「美しい環境」は、暮らしのたて方全体を「文化」として捉え、それをいかに美しいものとするかを考えていくことであり、衣食住や生活様式そのものが「文化」であり、暮らしのたて方としての日本文化のあり方を考え直すことが重要であること。
- ・「新しい文明の生態系」は、人間と自然の関わりについて考えることである。人間が自然に対し作為を始めた以降の「文明」のあり方を地球生態系の中で考えるという趣旨であること。
- ・「安全のためのシステム」は、こうしたあるべき「文化」、「文明」を実現していくための制度論を考えていくということであり、いかに実効性あるシステムをつくるかが課題であること。

●第4分科会報告の概要

そうしたねらい、枠組みの下で検討が進み、最終的には表1の概要となる報告書が取りまとめられた。

表1 第4分科会報告の概要

基本認識	環境や安全を守るためには、個人や政府の役割を問い直し、新しい関係をつくりあげることが必要
美しい国土と安全な社会を実現する4つの提言	①暮らしの豊かさとの問い直し ・魅力ある文化の創造：個人の生き方の総体が「文化」 ・「もの」の価値の再発見：物の豊かさとの心の豊かさの両立
	②個人と社会との新しい関わり合い ・個人が自立し、他人の自立を助け、人やものに進んで関わりを持つ人になること ・活かし合う透明な制度：自己決定と自己責任、情報の提供、透明な制度
	③新しい関係の実践の場としての「地域」の自決 ・暮らしの場としての「地域」：新しい個と公の関係の構築 ・住民主体の地域ガバナンスに向けて：自治能力の向上、水平型・開放型システムへ
	④危機管理の戦略 ・戦略的に思考する：減災対策、早急な復旧対策が重要 ・科学と情報を使いこなす：情報を共有する仕組みづくり ・連携して危機を管理する：関係者間の横断的な危機管理機構の設置

出所：第4分科会報告より筆者作成

第4分科会の座長である川勝氏は、「21世紀の国土のグランドデザイン」を審議した国土審議会の委員であった。このため、第4分科会報告の内容には、「グランドデザイン」の考え方が、文化面を中心にかなりの程度引き継がれている。また、その英訳が、“Japan’s Goals in the 21st century”とあるように、「21世紀日本の構想」は、極めて理念型のビジョンであり、基本的には、政策の提言ではなく、考え方の提言であった。

●作成過程を重視したビジョン

「21世紀日本の構想」の著しい特徴は、その内容ではなく、作成過程にある。構想の解説書にも、「懇談会では、構想を固めていくプロセスを重視し、より外に開かれた形で議論を深めることが一貫して追求された」(p.12)とあるように、作成に当っては、幅広い意見を求めた。特に総理大臣が国民と直接意見交換をする「総理と若者との対話集会」の開催は画期的な取り組みであったし、それ以上に、諸外国(シンガポール、米国、フランス、韓国、中国)との積極的な意見交換は、それまでのビジョンには見られない特徴であり、

本構想にかかる意気込みを感じさせるものであった。「21世紀日本の構想」は、総理ビジョンとしては始めて、作成過程を意識的・戦略的に位置づけたものであった。

現在、ビジョンや計画は、その内容だけではなく、作成過程をどう設計するかということも同じように重要になっている。我々が先例に学ぶときにも、作成過程にも十分な注意を払うことが必要であろう。ただ、作成過程の重視は、その運用を間違えると、手続きだけが過度に重視される結果、計画内容がおざなりになったり、多数意見の単なる寄せ集めのなものになる危険性も同時に秘めている。国家目標をどこに定めるかというような極めて重要かつ基本的なテーマについては、オープンで幅広い議論と同時に、トップの明確な意思、方針が必要不可欠である。

●小淵総理の認識

それでは、作業発注者の小淵総理の考えはどのようなものだったのだろうか。第1回懇談会の挨拶を見ると次の趣旨の発言がなされている。

- ・他人にやさしく、美しいものを美しいとごく自然に感ずることのできる社会、また、隣人がやさしく触れ合うことのできる社会、そして何よりも住みやすい地域社会を建設することが必要であると考えていること。
- ・21世紀における日本のあるべき姿として、経済的な富に加えて品格あるいは徳のある国、物と心のバランスのとれた国家として、他の国から顧みて真に尊敬に値する国とすべきこと。

総理としての自制もあろうが、その内容は極めて普遍的で、具体化に向けての絞り込み等もなされていない。一言で言えば、小淵総理ならではというものがほとんど感じ取れない。以下では、この点を考えてみる。

●総理ビジョンの質感の変化

5回という限られた回数ではあるが、総理ビジョンを年代順に読んでくると、総理ビジョンの質感の変化とでもいべきものが感じられる。

それを強く印象づけられるのは、「日本列島改造論」、「田園都市国家構想」、「ふるさと創生論」という3つのビジョンには、田中、大平、竹下という各総理が生まれ育った故郷や自身の生々しい体験が根底に感じられるのに対して、「生活大国5ヵ年計画」と「21世紀日本の構想」にはそういった個人的な体験がほとんど匂わないことである。前者は土や草の香りがするが、後者は無味無臭であり、極めて人間くさい体験とか経験というものをろ過した後に残る、抽象的・概念的な上澄みから生み出されているように感じる。極論すれば、「生活大国5ヵ年計画」と「21世紀日本の構想」については、宮澤総理、小淵総理でなくても、同じようなものが生み出されたのではないか。そのような印象を受けてしまう。

もちろん、ビジョンという同じ言葉と使っても、その内容や役割、作成方法は様々であるし、総理の性格や考え方も異なる。こうした色々な要素が絡み合っ、たまたま、「生活大国5ヵ年計画」と「21世紀日本の構想」については、そう感じられるのかも知れない。偶然かも知れないが、しかし、時代の変化というもう少し構造的なものを反映しているのかも知れない。

●総理ビジョンは無個性化しているのか。

そもそもあるビジョンや計画に個性が感じられるためには、そのビジョンや計画の主張が明確であることと、他との違いがはっきりしていることという2つの要件が満たされなければならない。前者は絶対的な要件、後者は相対的な要件である。

絶対的な要件については、日本列島改造論から生活大国5か年計画までの4ビジョンは、ほぼクリアしているものと考えられる。

理由は2つある。第一の理由は、これら4ビジョンについては、「列島改造」「田園都市国家」「ふるさと創生」「生活大国」というキーコンセプトが存在し、それらがビジョンの名称に組み込まれていること。第二の理由は、これらキーコンセプトがある種の具体的なイメージを喚起させることである。

確かに、それぞれのキーコンセプトが意味するところが国民一般に正確に理解されていたかは大いに疑問であるし、キーコンセプトから喚起されるイメージと実際のビジョンの内容とが一致している保証もない。そうした頼りなさはあるものの、国民の多くが、ビジョンの内容を事細かに読むとは思えないことを考えれば、ビジョンの中核部分が簡単なキーコンセプトやキャッチフレーズに還元され、そのキーコンセプト・キャッチフレーズに強力なイメージ喚起力があることは、総理のビジョンとしては極めて重要なポイントであると言えよう。

これらに対して、「21世紀日本の構想」については、その名称が完全なる普通名詞の連なりであり、そこには「列島改造」等の固有性が見られない。加えて、具体的なイメージを喚起させるものでもない。「21世紀日本の構想」の副題は、「日本のフロンティアは日本の中にある—自立と協治で築く新世紀—」であるが、これも訴求力に欠けると言わざるを得ない。

次に相対的な要件であるビジョンの個性である。これはかなり感覚的な判断になるが、「日本列島改造論」が個性的なことについては異論がないだろう。また、「田園都市国家構想」は、極めて多数の専門家を動員して作成された理念型ビジョンの典型といえるし、「ふるさと創生論」は、ビジョンそのものではないが、「ふるさと創生1億円事業」という個性的な施策を生み出したことで際立っている。この3者に比べて、「生活大国5か年計画」「21世紀日本の構想」は、ビジョンの内容においても、具体的な施策展開においても、相対的に個性が乏しいと言わざるを得ない。

●国土計画に見る個性の低下

個性の低下傾向は、総理ビジョンに固有のものではなく、行政計画である全国総合開発計画においてもうかがえる。

歴代の全総を見ると、キーコンセプトあるいはキャッチフレーズが開発方式から基本目標に移行していることが分かる。三全総までは「拠点開発方式」「大規模プロジェクト構想」「定住構想」というように開発方式が中心になっていたが、四全総では「多極分散型国土」という基本目標と「交流ネットワーク構想」という開発方式とが両立し、五全総では「参加と連携」という開発方式よりも「多軸型国土」という基本目標の方に中心が移っている。

基本目標よりも開発方式や重点施策にウェイトを置いた計画の方が個性は感じられやすいだろう。開発方式中心から基本目標中心へという流れは、国土計画に求められるものの変化を反映した結果であると考えられるが、それが、かつてのような個性的な計画の作成を難しくしている一因とも思われる。

●「時代が違う」は逃げ口上である

だが、総理ビジョンは様々な行政計画とは比較にならないほど主体性、求心性が高く、ビジョンの性格づけや記載内容について、他からの制約を受けることは少ないはずである。

それなのに総理ビジョンが無個性化しているのは、一言でいえば、多くの人々の心をとらえる、分かりやすいキーコンセプトやキャッチフレーズを提出できなくなっているからである。

この点に関しては、いろいろなことが指摘されているが、その中でも、よく聞く一見もったもらしい解説はこういうものである。すなわち、「かつては、社会の中で意見に大きな差異が少なく、キーコンセプトやキャッチフレーズの絞り込みが容易だった。しかし、近年は、価値観の多様化により、一つのキーコンセプトやキャッチフレーズに絞り込むことが不可能になった」というものである。

確かに、そういう面があることは否定しない。根本的な対立をほぐすことは容易ではない。それが分っていても、あえて異論を呈したい。というのは、キーコンセプトやキャッチフレーズを絞り込むこと、選択することの難しさは、その場に立った人間にとっては、昔も今も変わらないように思うからである。かつては、意見の差異が少なかったとしても、反対意見はあったわけだし、また、仮に目標レベルでの意見対立が少なくても、施策レベルでは大きな意見対立があるかも知れない。計画の階層をたどれば、結局はどこかで意見対立が存在することになる。ビジョンの成否を分けるのは、その対立箇所で適切なキーコンセプトの選択なり、設定なりが出来るかにかかっている訳だから、その時の意思決定にかかわる人間は、現在と同じような困難を感じ、苦しんだに違いない。要するに、昔の方が容易だったと考えてしまうのは、現在の我々が歴史の結末を知っていることがかなり影響しているのではないだろうか。

いつの時代にあっても、ビジョンづくりの難しさにかわりはない。決して、昔は簡単だったわけではないと思う。今日できないことを時代のせいにするのは責任回避以外の何者でもないのだという気持ちを失ってはなるまい。

「21世紀日本の構想」は、小淵総理に報告された約4ヶ月後に、当の総理が逝去されことから急速に影響力を失い、人々の記憶から薄れていった。確かに、強い個性を放つ内容ではなかったものの、それまでのビジョンとは異なり、その作成過程が重視された構想であった。その意味で、新しい計画観を反映した、新しいタイプの構想であったともいえよう。

● 21世紀日本の構想 目次

はじめに

第1章 日本のフロンティアは日本の中にある(総論)

日本の巨大な潜在力／変革強いる世界の潮流／何が問われているか／21世紀日本のフロンティア／日本の志ひとりひとりの志

第2章 豊かさと活力(第2分科会報告書)

はじめに／「富を創り、富を活かす」／「参加し、公を担う」／中央政府の役割と国民／おわりに

第3章 安心とうるおいの生活(第3分科会報告書)

はじめに／不安の本質と対処／時代の転換が引き起こす不安／転換期を生かして21世紀を安心の社会に／安心とうるおいの社会の提案／おわりに

第4章 美しい国土と安全な社会(第4分科会報告書)

開かれた社会の環境と安全の確保に向けて／物心ともに豊かな暮らし／「活かし合う社会」づくり／「地域」の自決／危機に強い国づくり／おわりに

第5章 日本人の未来(第5分科会報告書)

はじめに／教育のもつ二面性／日本の教育をめぐる現状と課題／改革のための提言／最後に

第6章 世界に生きる日本(第1分科会報告書)

はじめに／20世紀の財産目録／21世紀の課題／21世紀の世界に生きるための国内基盤／おわりに

注：本論は筆者の個人的見解です。

5回にわたり掲載した「歴代総理大臣の国土ビジョンを読む」は、ひとまず今回で終了します。